

座長のまとめ

第1群の座長をつとめて

平松知子

(金沢大学大学院医学系研究科)

第1回看護実践学会学術集会、第1群の発表は、看護管理上重要な転倒予防や新卒看護師の臨床看護実践能力、看護業務体制、および看護過程展開困難な事例など、臨床現場で生じた問題を研究課題とした興味深い発表が続きました。

第1席「手術室応援業務への支援ー外来看護師の不安内容の分析からー」(発表者 公立能登総合病院 正木薫さん)、手術室業務を応援体制で行っていることに対して看護師が抱えている不安を質的に分析された研究でした。ベナーの理論を用いて不安を理論的知識の習得と実践的知識の習得の段階に分けて抽出し、円滑な手術室応援業務への具体的な支援について考察されました。応援体制の頻度および手術内容による違いについて質問があり、対象の特徴を考慮することで、さらに手術室応援業務改善につながる可能性が示されました。

第2席「施設高齢者の転倒リスクに応じた転倒予防ー転倒による骨折者の特徴およびフィードバックした結果に対するスタッフの反応ー」(発表者 済生会新潟病院 石井和子さん)、アクションリサーチを用いて転倒・骨折事故の分析、およびその結果を提示されたスタッフの反応を調査された研究でした。結果をフィードバックすることは、スタッフの転倒ケア能力と転倒予防ケアへの動機となったという内容でした。転倒は多くの臨

床現場に共通した議題であり、今回の結果は具体的な転倒予防策を考える上で参考となると思われます。

第3席「一症例における赤痢アメーバ腸炎から人工肛門となったHIV患者の看護ーフィンクの危機モデルを用いて振り返るー」(発表者 石川県立中央病院 織田真由子さん)、虫垂炎発症からHIVの診断・告知を受けた患者の社会復帰までの心理過程と看護介入を看護記録から振り返り、フィンクの危機モデルを用いて分析された研究でした。対応困難と判断された1事例を丁寧に振り返ることで、患者の心理過程に沿った看護実践が行われていたことを確認することができました。

第4席「一般病棟と回復期リハビリテーション病棟の新卒看護師における臨床看護実践能力の比較」(発表者 やわたメディカルセンター 小西あけみさん)、厚労省の新人看護職員研修到達目標を基準に実施している新人研修の評価を病棟別に分析された研究でした。評価は、厚労省の到達目標を用いて13領域の技術項目の到達度を自己評価する方法で、臨床看護実践能力は病棟の特長による差があり、今後は集合教育プログラムの必要性や研修時期について考察されました。

最後に、新しくスタートする看護実践学会のさらなる発展をお祈りいたします。また、座長の機会をいただきましたことに感謝申し上げます。

第2群の座長をつとめて

村角直子

(金沢大学大学院医学系研究科)

看護実践学会におきまして座長の任をいただきましたことは、光栄に思っております。ここでは各研究の紹介と会場であがった意見についてお伝えします。

第2群の3題の発表演題は、患者の意識および看護者の看護判断・ケアに焦点を当てた研究でした。研究の方法は、患者への調査研究、看護師への面接調査研究、一例の援助過程を丁寧に分析し

た事例研究とさまざまでした。

第1席「緑内障患者への生活指導に関する援助ー緑内障性視野障害初期・中期・後期のステージに患者が必要としている指導内容の把握ー」発表者 古田瑞穂さんで、緑内障患者が自己管理できるようセルフケア能力を高めるために、適切な指導が必要であるとの信念のもとにされた研究でした。分析は病期を初期・中期・後期の三段階でとらえていた点が特徴でした。会場の質問では、病気の進行につれて変化する自己管理状態と今回の結果との関連、質問項目の作成方法、緑内障の悪化の度合と自己管理状態との関連について話題となりました。結果として病期別の生活指導のニーズには統計的な有意差はありませんでしたが、各ステージでの指導、情報提供の必要性が明らかとなりました。

第2席「頓用薬使用についての看護判断とケアの特徴ー非定型抗精神病薬で治療中の総合失調症患者に焦点を当てー」発表者 赤坂政樹さんで、頓服薬使用場面において非定型薬で特徴を活かしたケアがなされているのか、臨床の活動で生じた

疑問から出発した研究でした。会場で話題となったのは、効果的でない関わりは今回の研究では分析対象となっているのか、効果的であったことの定義でした。また、頓用薬使用時あるいは非定型抗精神病薬使用時の場面特有のカテゴリーのネーミングについて話題となりました。

第3席「外来における終末期がん患者の意思決定を支えるケアの検討」発表者 福田裕子さんの研究の出発点は、限られた時間と環境で、患者の力となりえたのか、意思決定を支えることができたのかという思いでした。研究者が援助過程を評価し振り返る、実践に即した研究でした。他職種との連携、患者への援助者としての紹介、うまくいかなかった事例との比較について会場で話題となりました。主なケア機能が一般的なネーミングとなっていたことが指摘され、終末期がん患者への意思決定を支える援助としてのケア機能の特徴が期待されました。

今後、看護実践学会のますますのご発展をお祈りいたします。

第3群の座長をつとめて

紺 家 千津子

(金沢大学大学院医学系研究科)

第3群は、学会企画の共同研究発表でした。この学会企画とは、前身の石川看護研究会が平成18年度に開始した「テーマ別共同研究チーム」事業です。これまでは、主に会員個人、あるいはその施設の研究の充実を図るために事業展開が行われていました。しかし、本事業は従来とは異なり、複数の施設会員が共同して研究実践を行うことが特色となっていました。その成果を初めて発表する機会が看護実践学会へと改組した年であったことは、本会が学会へと成長を遂げた証として相応しい企画であり、かつ研究内容であると考えております。そして、この群の座長の機会を私にあたえてくださいましたことを感謝しております。

以下に、担当させて頂いた4演題について紹介します。

1席は、糖尿病ケア共同研究チームの野村仁美さんが、石川県内の28医療施設における糖尿病療

養指導を行う看護師と日本糖尿病療養指導士(CDEJ)の現状を報告しました。約8割の施設では糖尿病患者教育システムが整っているが、看護師の教育システムの確立とCDEJとしての能力が十分活かされていないという課題が提示されました。

2席は、転倒予防共同研究チームの中西容子さんが、各3施設の一般病棟と回復期リハビリテーション病棟における転倒と排泄に関連した転倒者の特徴を報告しました。いずれの病棟も転倒者は高齢者が多く、排泄と転倒の関係では回復期リハビリテーション病棟では昼夜と排泄場所が異なる患者に多い等の実態より、排泄に関する転倒予防のケアの必要性が示唆されました。

3席は、褥瘡共同研究チームの熊谷あゆ美さんが、10施設の褥瘡保有退院者の実態と転院先の動向を報告しました。褥瘡保有退院者は褥瘡を既に

院外で発生し、かつ転出先も様々であるという実態から、多施設との連携の在り方が課題として提示されました。

4席は、リエゾン精神看護共同研究チームの齊藤萌子さんが、患者と看護師を対象にリエゾン精神専門看護師の必要性について報告をしました。調査結果から、看護師はコミュニケーション技術を養うために、患者は心のケアを求めるためにリ

エゾン精神専門看護師を必要としていることが導き出され、リエゾン精神専門看護師の必要性が示唆されました。

最後に、4演題の研究成果はいずれも看護実践に活かせる内容であり、研究の継続と発展が期待されます。

第4群（示説）の座長をつとめて

長 田 恭 子

（金沢大学大学院医学系研究科）

第1回看護実践学会学術集会において、一般演題（示説）の座長をつとめさせていただきました。これまでの石川看護研究会学術集会では示説発表はなく、今回が初めての試みでした。

第1席、金沢大学医学部附属病院の池端三永子さんの発表は、肝・胆道疾患患者の掻痒感緩和のためのケアとして、保湿力のあるグリセリンを使用したよもぎローションを作製し、その効果を従来のよもぎローションと比較検討した研究でした。

第2席、金沢大学医学部附属病院の下美由紀さんの発表は、C型慢性肝炎の新しい治療法であるペグインターフェロン α -2b・リバビリン併用療法を受ける患者の副作用の種類や出現時期、その程度を明らかにし、より効果的な看護援助につなげることを目的とした研究でした。

第3席、県立広島大学保健福祉学部看護学科の大内隆さんの発表は、地域住民を対象に健康啓発および地域結びつきの強化を目的とするプログラム構築のための試行として、交流会の実施を行ったものでした。

第4席、国立病院機構金沢医療センターの宮内真依子さんの発表は、患者・家族の退院指導に生かすため、オムツを使用している患者を迎える家族の排泄介護についての思いを明らかにした研究でした。

今回の4題は幅広い分野からの発表でしたが、いずれも実践の場から生まれた疑問に率直に取り組んだものでした。発表方法も工夫されており、フロアからも活発な質疑や意見があり、大変意義深いものであったと思います。しかし会場が受付と隣接していたため発表内容が聞き取りにくかった、発表方法についての事前の打ち合わせが不十分であった等のご意見もあり、今後の課題であると同時に、座長として力不足であったことをお詫びいたします。

最後になりましたが、研究に取り組まれた皆様には、今回得られた結果を実践に生かし、さらに研究を発展させていただきたいと思います。また、座長の機会をいただきましたことに感謝いたします。